

2012年  
12月17日  
月曜日

韓 燕麗 准教授（映画史）

## 海の向う側の浪

二つの曲について話そう。一つは、誰もが一度は耳にしたことがあるクラシック音楽の名曲で、ベートーヴェン作曲の「歓喜の歌」。もう一つは、おそらくここにいる皆さんが誰も聞いたことがない、チベット民謡で「シガツェワ」という曲である。

中国では、文化大革命の10年間、西洋由来のクラシック音楽が「資本主義敵国の文化」として禁止されていた。文化大革命が終結した1970年代末から、再びクラシック音楽が庶民に享受されるようになり、ラジオではクラシックの名曲を録音させるための長時間番組が毎日のように放送されていた。そのおかげで、私は小学校に入る前から、クラシック最高の名曲を一通りぜんぶ聞いた。一生の友になるこれらの名曲の数々のなか、その当時とくに好きだったのは、ベートーヴェンの交響曲第9番「短調の第4楽章」、「歓喜の歌」として親しまれる合唱の部分であった。音楽史におけるその記念碑的な意義について知ったのは、無論だ。ぶ後のことだが、幼少時代の私に

は、単純にその歓喜に満ち溢れ、気持ちを高揚させるメロデイがとて心地よく感じられた。

それから約20年後のことである。ある日テレビから「歓喜の歌」のメロデイが聞こえ、大好きな曲なのでテレビに近づいてよく見たら、コマージュナルにその曲が使われていた。ただ歌詞は中国語によるもので、およそ以下の意味になっていた。「私は、海の向こう側で、波がどうなっているのか見てみたい。私は、自分と同じような、好奇に満ちた目と見つめ合いたい」。馴染みのあるメロデイと相まって、中国少年合唱団によって歌われたその歌詞は、私の心に響いた。

このコマージュナルを見た一年後、私は京都であらたに学生生活を始めていた。以来十数年、世界中の海辺でさまざまな波を見てきた。自分と同じような、あるいは異なるような、さまざまな目と見つめ合ってきた。人生って不思議なものである。さて二曲目の話しよう。今年の5月、川辺ゆかさんという神戸生まれ神戸育ちの日本人女性と知り合っ

た。ご自宅で開かれる小さなコンサートに招かれた私は、はじめて乗った神戸電鉄に揺られ、たった十分後には都会の喧騒から脱出し、藍那駅の近くにある築200年の古い民家の座敷に座っていた。チベットの伝統衣装を身にまとった川辺さんは、ダムニエンというチベットの弦楽器を弾きながら、「シガツェワ」などチベットの民謡、そして日本の田植えの唄や東欧の民謡などを歌った。5月のお庭は緑にあふれ、心地よい風の中に草のおいが交じっていた。遥か遠いチベットからのメロデイが、日本の伝統家屋の空間のなかで響き、不思議なことにもよくマッチしていた。優しい時間が流れるなか、私は心の中でひそかに決めていた、「よし、今年会った素敵な人ランキング、女性ベストワンは川辺さんでしょう！」と。

川辺さんは大学在学中、家庭の事情で心が傷つき、どこでもいっから遠いところに行きたいという一心でチベットに出かけた。そこで出会ったチベットの民謡に魅了され、今日のチベットでは失われつつある伝統

民謡を、チベット語で歌い続けている。川辺さんは現在、日本国内をはじめ、オランダ、ベルギーなどで演奏活動もやっている。「うた旅行家」と自称する彼女は、自分がやっていることを「自らの足で訪れ、時間をかけて、宝物のように拾い集められた歌を異国の言葉と美しいメロデイで表現」と言う。

ふとしたことで、世界へ足を向けた私と川辺さんがいた。あなたが海外に出かけるふとしたきっかけはどこにあるのだろうか。創立以来、世界市民の育成をミッションとしてきたわれわれの大学は、多文化と共生し、国際的に通用する人材を育成するために、海外への学生派遣プログラムを拡充・整備している。また、文部科学省は2012年の「グローバル人材育成推進事業」に関西学院大学の構想を採択したことを、ご存じだろうか。世界へ新たな窓を開けるために、海を渡って、この海の向こう側の波を見に行こう。その行動は、多少の苦勞を伴うかもしれない。しかしそれは、人生をより豊かなものにするに違いない。